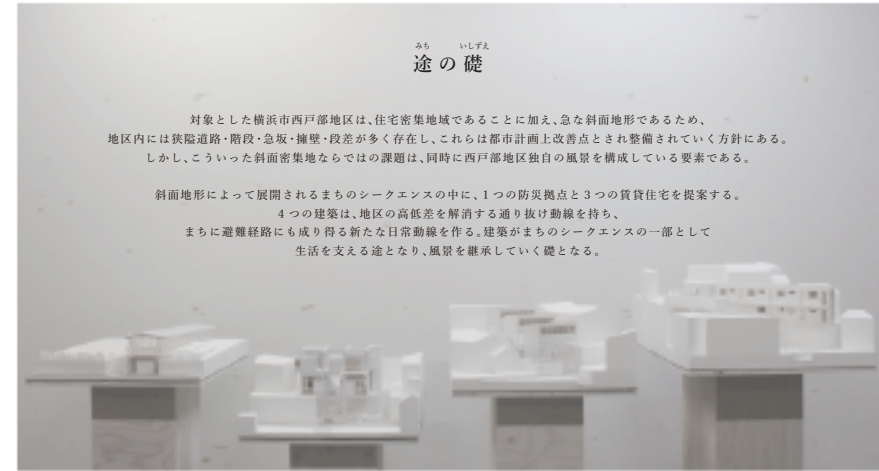




1. 横浜市区西戸部町

横浜は全国で最も人口が多く、最も斜面住宅地の多い市である。明治 22 年の市政施行時と比較すると現在の人口は約 32 倍、面積は約 81 倍にまで達している。昭和 30 年代半ばからの急激な人口増による都市のスプロールは、水平な土地だけでなく丘陵地にまで広がっていったため、現在横浜市のおよそ 60% の住宅が丘陵地に属している。

対象とした横浜市区西戸部町は、横浜の中の臨海丘の手エリアと呼ばれ、みなとみらいなどの都心部に近い高台の住宅地に位置し、野毛山と尾根続きの高低差 26m のすり鉢を半分に切ったような北西に開いた傾斜地にある。市の市街地改善のための事業にも指定されており、起伏ある地形が障害となって、防災面や住環境に多くの課題を抱えたまちである。



横浜市区西



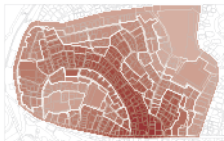
西戸部町

2. 斜面密集地の課題

対象地区内の道の全てが幅員 4m 未満の狭隘道路となっていて私道が多い上に、そこには木造住宅が密集して立ち並んでいる。老朽化しているものも多く見られ、震災時の倒壊や火災の拡大による被害が懸念される。また、階段が多くあることから、緊急車両の立入りが困難なばかりか、災害時の避難経路も安全な状況とは言えない。地区内の防災的に有効な広場は二ヶ所あり、一つは小学校の校庭、もう一つは現在空き地となっている場所である。しかし、この二つの広場は現在地区内からはアクセスが悪く、外周の道路に一度出ると、整備のされていない狭い階段の道を通るしかない。



密集



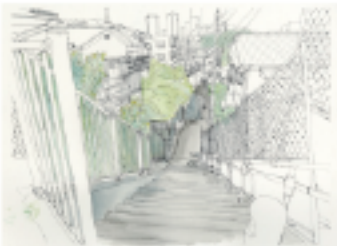
地形



研究対象地区幅員6mの道路に囲われたエリア



a: 階段を下って地区内へと入っていく



b: 急階段を登りきると視界が開けた



c: 高い擁壁に挟まれた階段へと進む



d: 高低差によりクスターが出来ている



e: 森へと誘うような階段へと繋がった



f: 道より低い住宅と高い擁壁に挟まれる



g: 緩やかに曲がりながら坂道を下る



h: 高い擁壁による行き止まりに当たった



i: 風景を見ながら曲がり道を降りる



j: 抜ける視線の先には階段が見える



k: 小広場から町を広く見えた



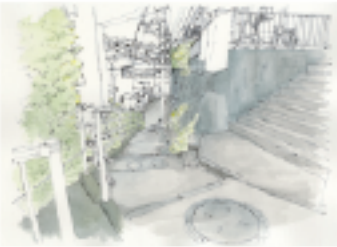
l: 背の高い擁壁が連続して立ちほだかる



m: 擁壁と樹に挟まれた狭い坂道を登る



n: ガードレールと擁壁が奥まで続く



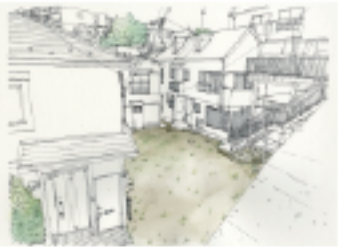
o: 無秩序に踊り場が出来ている



p: 狭い道の先は擁壁による丁字路



q: 階段にスロープと手摺がついている

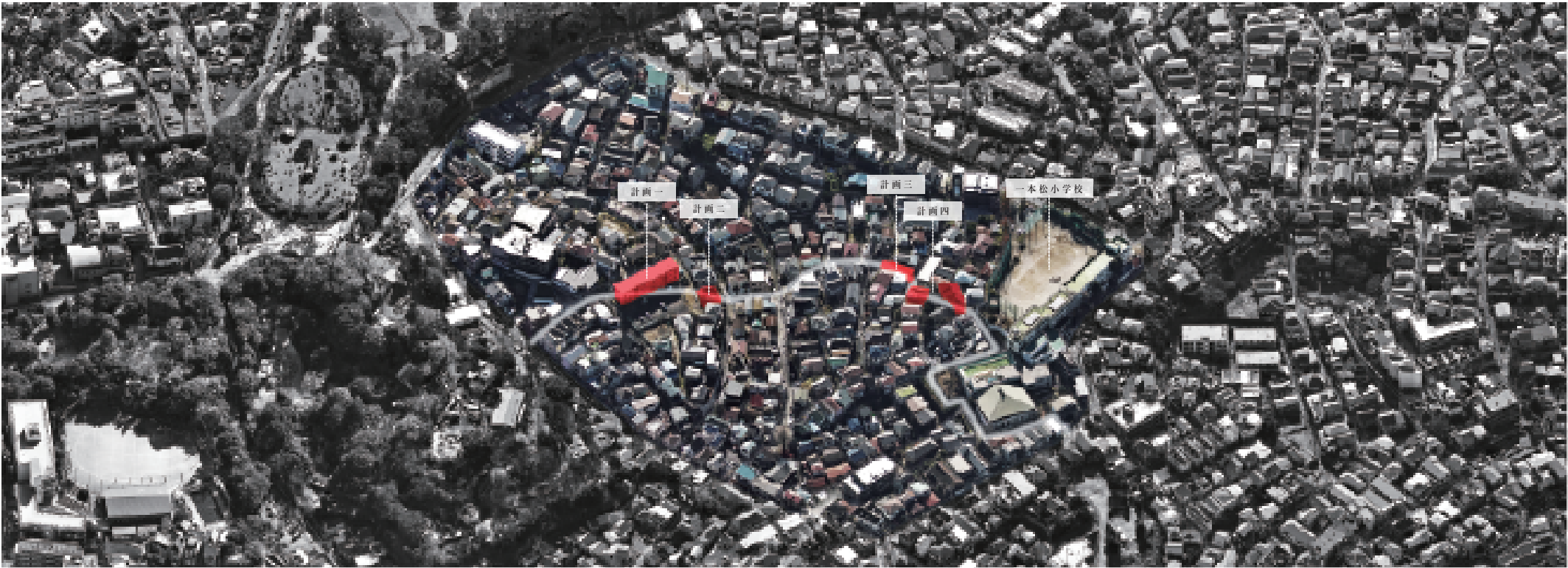


r: 道路から1層分低く家が建つ

	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o	p	q	r
視点(中央)	狭隘階段(下り)	急階段(下り)	狭隘階段(上り)	狭隘道路	狭隘道路	狭隘道路	緩い坂道(下り)	狭隘道路	狭隘階段(下り)	狭隘道路	広場	狭隘道路	急坂(上り)	狭隘道路	狭隘道路(下り)	狭隘道路	狭隘階段(下り)	道路
道の先	視線が抜ける	視界が開ける	緩く曲がる	—	上り階段に続く	緩く曲がる	視線が抜ける	擁壁	視線が抜ける	上り階段	視界が開ける	緩く曲がる	曲がる(擁壁)	視線が抜ける	視線が抜ける	擁壁	緩く曲がる	—
左側	住宅	住宅(階段の脇)	擁壁	—	住宅	擁壁	住宅	住宅	擁壁	住宅	—	住宅(階段の脇)	住宅	擁壁	住宅(庭)	住宅	住宅	住宅群
道に対して	同じ高さ	低い	高い	—	少し高い	高い	同じ高さ	同じ高さ	高い	同じ高さ	低い	高い	高い	高い	低い	同じ高さ	同じ高さ	低い(下り階段)
右側	住宅	住宅(階段の脇)	擁壁	住宅群	住宅、奥に木々	住宅	住宅の庭	住宅	擁壁	住宅	—	擁壁(車庫)	住宅	住宅(道の脇)	狭隘階段	住宅	住宅	—
道に対して	同じ高さ	低い	高い	低い(下り階段)	奥につれて高い	低い(下り階段)	同じ高さ	同じ高さ	高い	同じ高さ	—	高い	同じ高さ	低い	上り	同じ高さ	同じ高さ	—

3. 風景の収集

狭隘道路、階段、急坂、擁壁、段差といった斜面密集地ならではの課題は、地区の都市計画上の改善点としてあげられ、整備されていく方針にある。しかしこれらは同時に、西戸部町独特の風景の要素であり、斜面密集地の魅力を構成していると考えられる。単に改善点として捉えるのではなく、それらが生み出す魅力的要素を探ることで、西戸部町独自の地域改善の手がかりになるのではないかと。斜面密集地としての個性、主に地形が起因となっている風景に着目して、まちを歩き、スケッチを描き溜めていく。スケッチでは、地面レベルと、起伏ある地形が生み出したと考えられる擁壁、軒や階段、そして地面から生えた木々を着彩した。書き溜めた 18 枚のスケッチから、地区の改善点と魅力の関係性を分析していく。



4. 分析と類型化

視点となるスケッチ中央の道を基準として、その視線の先、両側に接するものの状況、高さ関係を表にし、18枚のスケッチを言語化した。作成した表から、共通するものを整理して、大きく5つのパターンに類型化し、ダイアグラムとして抽出する。「奥への誘導」、「段差の境界」、「町への進入」、「広がる視野」として類型化した4つは、狭隘道路、階段、急坂、擁壁、段差といったネガティブなものによって生み出された魅力的な風景である。擁壁は、奥へへ行きたくなるような誘導性を持つ道を作り、段差は、パブリックから少し離れた領域性のあるプライベートな庭空間を生み出している。また急階段や急坂の下り道は、視線が抜けたり、みなとみらいの方まで見渡すことができるなど、高い眺望性を持っている。

最後に、「視線の衝突」として類型化した風景は、斜面密集地区独自の風景と言えるが、まちの視野を狭め、交通を妨げる要因であり、防災的な観点から見ると改善箇所といえる。

- a: 階段を下って地区内へと入っていく
- b: 急階段を登りきると視界が開けた
- c: 高い擁壁に挟まれた階段へと進む
- d: 高低差によりクラスターが出来ている
- e: 森へと誘うような階段へと繋がった
- f: 道より低い住宅と高い擁壁に接する
- g: 緩やかに曲がりながら坂道を下る
- h: 高い擁壁による行き止まりに当たった
- i: 風景を見ながら曲がり道を降る
- j: 抜ける視線の先には階段が見える
- k: 小広場から町を広く見渡せた
- l: 背の高い擁壁が連続して立ちはだかる
- m: 擁壁と柵に挟まれた狭い坂道を登る
- n: ガードレールと擁壁が奥まで続く
- o: 無秩序に隣り場が出来ている
- p: 狭い道の先は擁壁になるT字路
- q: 階段にスロープと手摺がついている
- r: 道路から1層分以上低く家が建つ

奥への誘導

段差の境界

町への進入

広がる視野

視線の衝突

急坂や階段、もしくは緩いカーブによって道の先が見えない場所では、奥へと人を導く特性を持つ。また、狭い道に対して擁壁や柵がたち上る場所では、道への圧迫感が増し、誘導性も高まる。

道に接して擁壁がたっていたり、段差が生じて少し低い位置に家が建っている場所では、パブリックな道とレベル差があることで、プライベートに近い庭空間が生まれている。

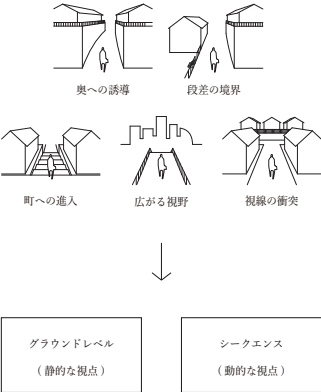
すり鉢状の地形をしているため、外周の大きい道路から狭い道路へと切り替わる地区内への入口は、階段を下る場所が多い。風景の変化が大きく、進入感が強いので、地区の一体感を感じる。

地区内に多く点在する階段や急坂は、密集地の中で視線が抜ける場所となり得る。地区の外周部は高度が高いため視野が開け、みなとみらいの方まで見渡すことができる。

見通しの良い道の先にあり、人の視線を引きつける建物や擁壁は、T字路や曲がり道に多く見られる。中には、行き止まりとなってしまう場所もあり、密集地の圧迫感を高めるものとなる。

5. キーワードの抽出

類型化された5つの風景から、計画のキーワードとして2つの言葉抽出する。斜面地形によって、グラウンドレベルは多様になり、あらゆる高さで人々の生活が現れている。段差によってプライベートに近い領域性を持った外部空間や、階段や急坂を上った先の眺望の良い風景は、多様なグラウンドレベルによる魅力である。また動的な視点でまちをみると、擁壁によって圧迫感を感じる狭い道から視界が開けた場所へと風景が切り替わったり、緩く曲がる坂道の誘導性を持つ道など、斜面地形によって豊かなシーケンスが生み出されている。



6. 敷地の選定

スケッチから類型化された視線の衝突する場所にたつ建物の位置をプロットする。さらに、地区内の道を示した地図と、防災的に有効な広場の位置を示した地図を重ね合わせると、2つの広場を結ぶようにして、一つの新たなまちの生活動線・避難経路となり得る軸線が見えてくる。軸線上の建築を、通り抜けの役割を持った建築へと更新していくことで、道がつながり、地区を通り抜けられるようになる。二つの広場へのアクセスがよくなることから、広場の価値が上がり、またアイストップとなっている敷地を選定していることで視認性を持った道となり、地区の防災面の向上につながる。

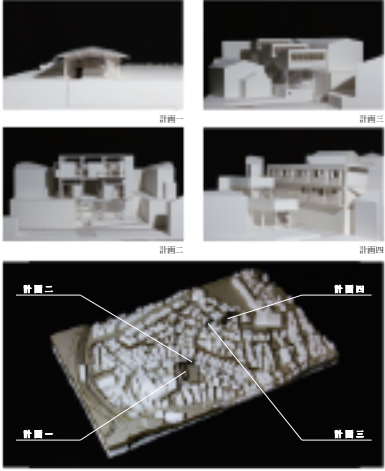


3つの地図を重ねると1本の軸が浮かび上がる

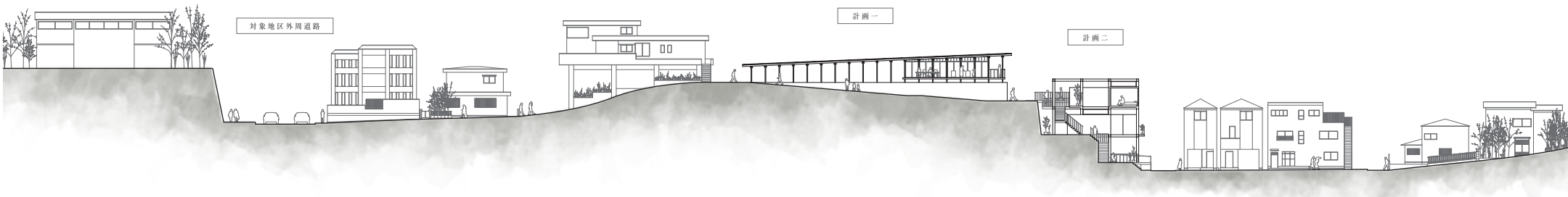
7. 局所的な建築の更新

空地は、地区内で貴重な水平で大きな土地であるため、防災拠点となる広場として転用し、4つの住宅は、高低差を解消する通り抜け動線を兼ねた賃貸住宅へと更新することを提案する。この軸線が繋がることにより、まちに新たな避難経路としても利用できる新たな日常動線が生まれる。

小学校に近い2つの住宅は、一体の敷地とし、計3箇所の敷地において、賃貸住宅を計画する。建築は、スケッチによる分析から導き出された要素を用いることで、まちの風景の連続となることを考える。全体計画を踏まえた最小限の局所的更新により、西戸部地区の風景の継承と防災面の向上を計る。

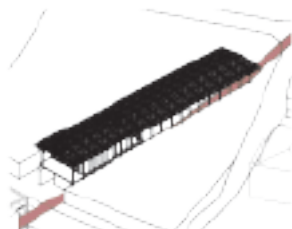


対象地区



計画一

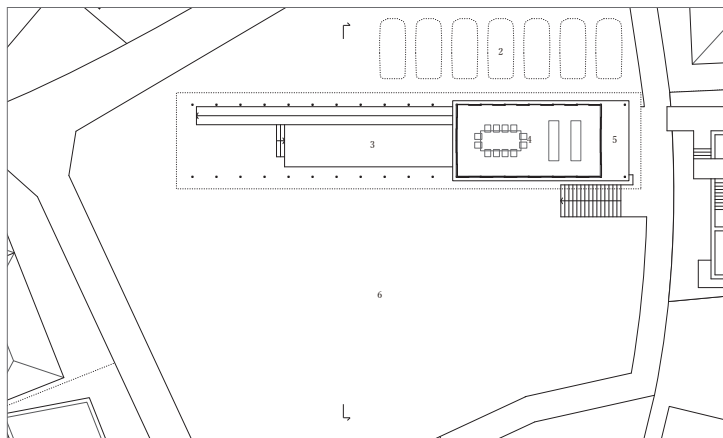
敷地は、地区内で貴重なフラットで広い空地である。広場、集会所、備蓄倉庫、トイレ、駐車場といった機能を設け、防災拠点として計画する。高低差を解消するスロープが軸線状に伸び、その上に長い屋根を架ける。地区の中央に向かって屋根が高くなり、低い位置では緑側のような場所が生まれ、高い位置に集会所が入る。先端に設けたテラスからは、まち全体を見渡すことができ、高い拠点性を持った防災広場となる。



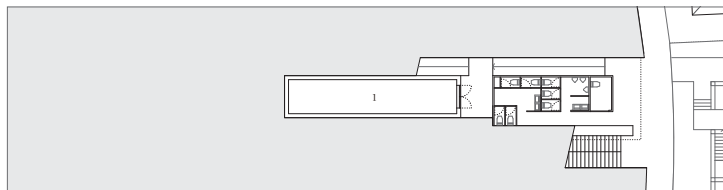
地区外周部の大きい道路に近接しているため、敷地内に駐車場を設ける。まっすぐ伸びた建築が広場空間と駐車場を区切るように配置され、手前の半屋外空間は広場に向かって座れる緑側となっている。緑側の下には備蓄倉庫、集会所の下にはトイレが入っている。



屋内空間は、自治会のミーティングスペースとしての利用などを想定した集会所とし、先端のテラスからは、まちを見渡すことができる。集会所の下をくぐり、スロープを下った先には計画二の敷地が続き、軸線を強調するフレームへと直線で繋がる。

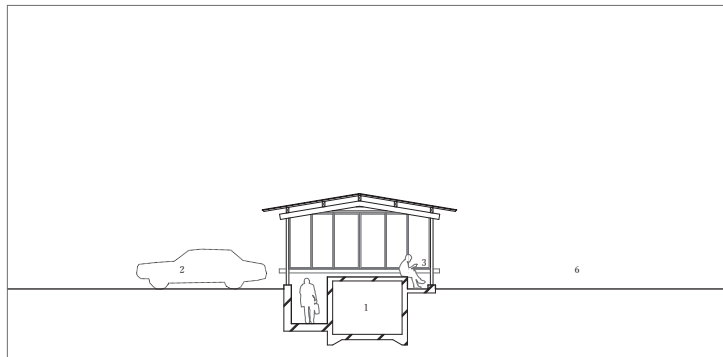


ground floor



Plan 1:200

semi-underground floor

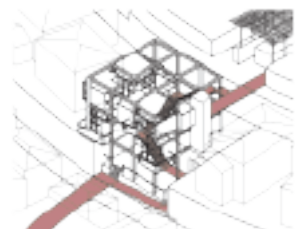


1.storage warehouse 2.parking 3.garage 4.meeting place 5.observation terrace 6.park

Section 1:100

計画二

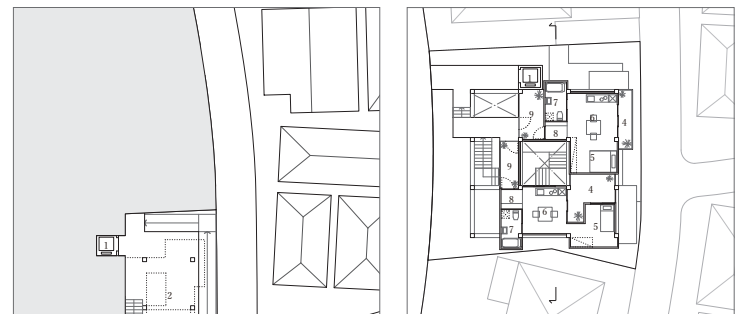
敷地は、前面に接する道から高い擁壁によって 4m 以上持ち上げられ、道に沿って連続しているため、建築のレベルとまちのレベルが分断されている。T 字路となるこの場所に、象徴的な 3.6m×3.6m×3.6m の RC フレームを土木構築物である擁壁と、建築の中間的なものとして作り、計画 I の広場へと繋がる通り抜け動線と 4 戸の賃貸住宅を計画する。フレームの全てに居住空間を挿入せず、余剰空間をつくることで、建築の一部がまちに還元されるような関係性を考えた。



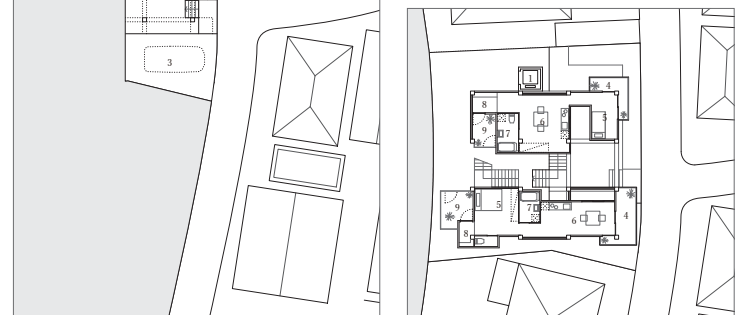
一階部分は共有庭としてまちに開かれた場所とする。接する道から 1 m 上がっていることで建築と道の領域を区切り、ベンチやまちの掲示板が置かれたポケットパークのような居場所になっている。前面の軸線の道からは上の広場へと続く階段が見えるように計画した。



建築に取り付いた階段とエレベーターによって広場へと接続する。住戸は、階段からの視線を遮る壁、光を通す半透明の壁、風を取り込む意をフレームに挿入し構成していく。4 戸ともダイニングキッチンが天井が高く、ハイサイドライトを設けている。



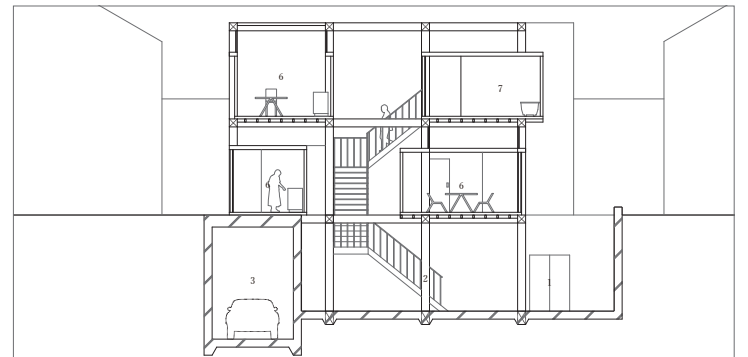
ground floor



Plan 1:200

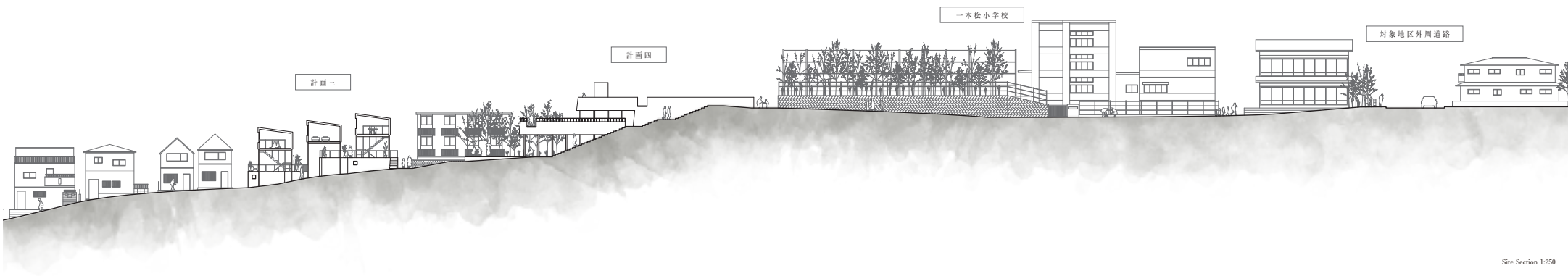
1st floor

2nd floor



1.elevator 2.public garden 3.garage 4.terrace 5.bedroom 6.dining kitchen 7.bathroom 8.entrance 9.garden

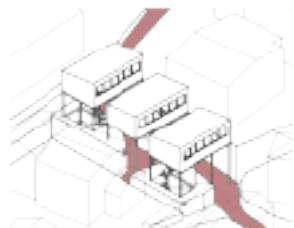
Section 1:100



Site Section 1:250

計画三

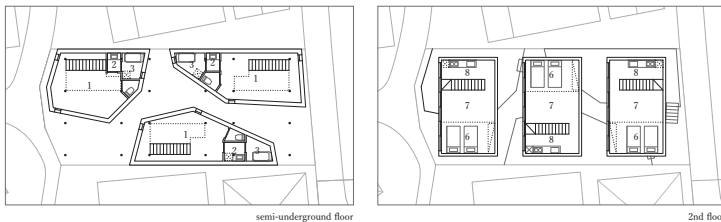
敷地は、開口が狭く細長い形状をしており、反対側へと繋がる通り抜け動線と 3 戸の賃貸住宅を計画する。それぞれ地面の部屋と上空の部屋といった質の異なる 2 つの空間を持ち、中層に入り口を設けた。地面の部屋には風呂とトイレが入り、地区内の擁壁の連続として、奥へと導く緩やかな坂道を作っている。上空の部屋には寝室とキッチンがあり、傾斜地を生かして開放的な空間とする。上下にプライベートな部屋を持つことで、中層の庭はまちに近い場所として計画した。



地面の部屋は地区の擁壁の連続で、緩やかに曲がる坂道のシークエンスを生み出している。また、半地下としたことで、中層の庭のレベルは低くなり視線が奥へと抜けるため、パブリックに近い開放的な場所となっている。

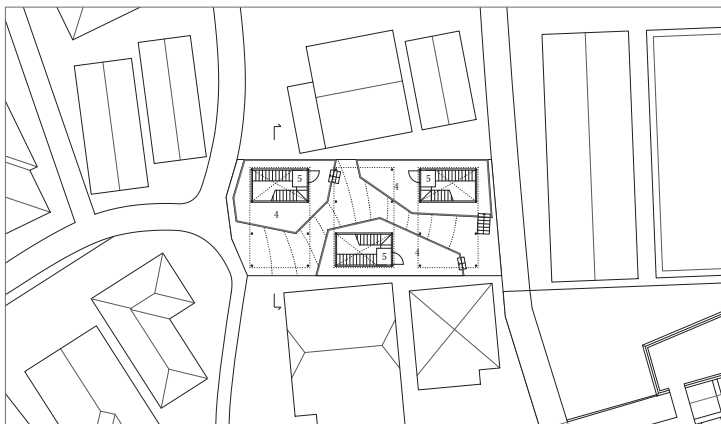


流動的に配置される地面の部屋に対し、傾斜に沿って整列した上空の部屋が浮かぶことで互いの間にズレが生じている。そのため、中層の庭と地面のレベルでは、空が抜ける場所や天井高さの異なるピロティ空間が多様に見える。



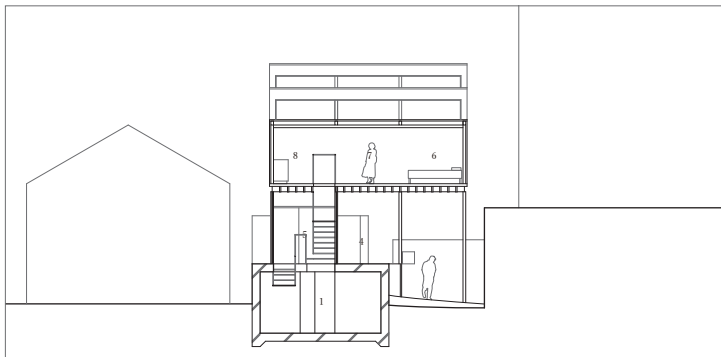
semi-underground floor

2nd floor



Plan 1:200

1st floor

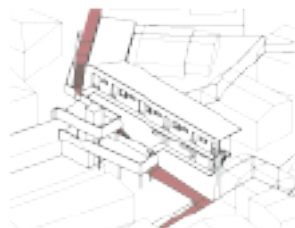


1.living room 2.washroom 3.bathroom 4.garden 5.entrance 6.bedroom 7.dining room 8.kitchen

Section 1:100

計画四

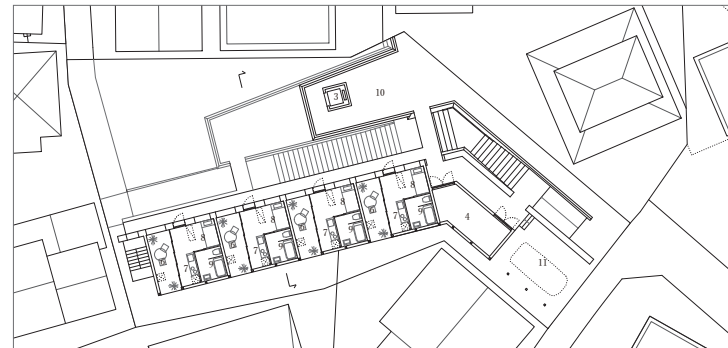
敷地は、2つの住宅が建っていた場所で約 8m の高低差を持つ。上下をつなぐ道と 6 戸の賃貸住宅、また小学校に近く登下校の利用が想定されることや、眺望のいい立地を考えて食堂と展望デッキを計画し、まちに囲まれる居場所をつくる。一本の階段の道を計画することで必要となる擁壁を上まで伸ばし、裏側に住宅が張り付く構成とした。パブリックな道とプライベートな住宅の境界線としての壁に玄関、窓、庭へ繋がる穴を開け、生活が現れることで、道と建築の接点考えた。



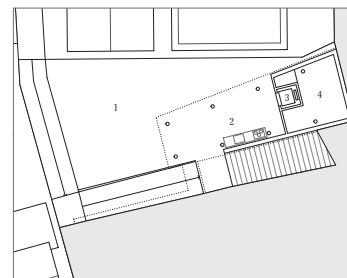
計画三の敷地からスロープによってキッチンのついた共有庭へとつながる。そこから更に、両側を壁に挟まれた誘導性のある階段の道が小学校へと続いていく。連続するシークエンスの中にまちの人々が溜まれる場を同時に計画していく。



各住戸は壁に 3 つの穴が開き、そのうちの 1 つは庭へと繋がっている。屋根のかかった半屋外庭を持たせることで、道と室内が間接的に繋がるように計画した。さらに、壁には廊下とブリッジが取り付き、境界としての壁が、道と建築の接点となっている。

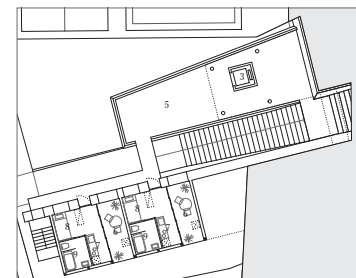


3rd floor



Plan 1:200

1st floor



2nd floor



1.public garden 2.share kitchen 3.elevator 4.storage warehouse 5.terrace 6.garden 7.kitchen 8.bedroom 9.bathroom 10.observation deck 11.parking

Section 1:100